

「個々の授業」から「統合されたビジョン」へ

小学校音楽科における戦略的カリキュラム・マネジメントの実践



なぜ今、 カリキュラム・マネジメントが 求められるのか？

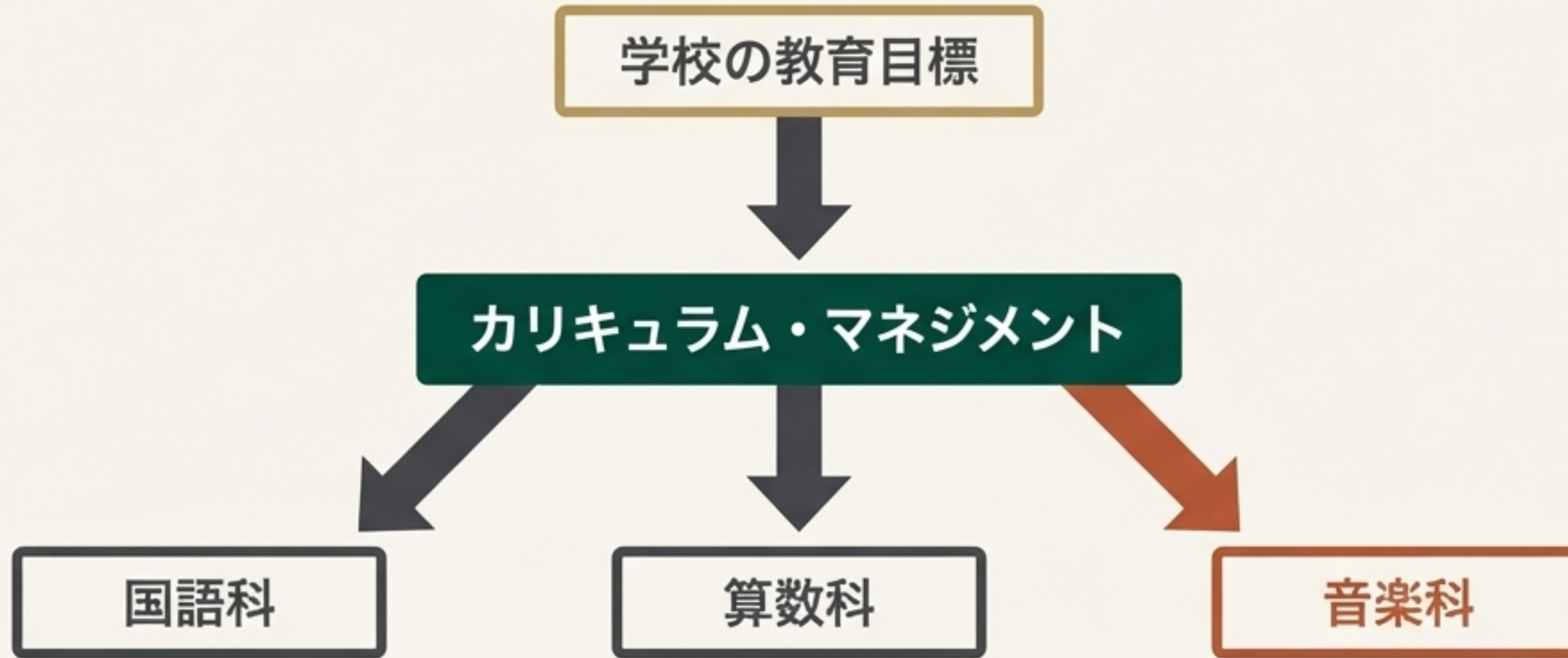
21世紀型の資質・能力の育成は、単一教科の取り組みだけでは達成できません。

音楽科の役割は、個別の楽曲を教えることを超え、生徒が自らの人生を心豊かに生き、他者と協働しながら新たな価値を生み出す力を育むことにあります。そのためには、場当たりの授業の連続ではなく、学校全体の教育目標と連携し、計画的に設計された教育課程（カリキュラム）が必要です。

「教科等を横断した、広い視点」が不可欠。



その答えが「カリキュラム・マネジメント」です



カリキュラム・マネジメントとは

学校の教育目標達成に向け、教育内容を組織的に配列し、PDCAサイクルを通じて継続的に改善していくための戦略的枠組みです。

これは、音楽科の専門性を学校全体の教育力に転換するための設計図と言えます。

カリキュラム・マネジメントを支える「3つの側面」



側面①：教科横断的な視点

学校の教育目標や現代的課題に基づき、教科の枠を超えて学びを組み立てる。



側面②：PDCAサイクルの確立

教育課程を「計画(P)→実施(D)→評価(C)→改善(A)」のサイクルで継続的に向上させる。



側面③：内外資源の効果的な活用

地域社会を含む、人的・物的資源を教育活動に効果的に組み合わせる。

側面①：教科の枠を超え、学校全体の目標に貢献する

音楽科として、学校や地域の課題解決にどう貢献できるかを明確にします。
現代的課題（例：ESD、防災教育、キャリア教育）と音楽の学びを結びつけ、年間指導計画に落とし込みます。

引用：「年間指導計画作成にあたっては、図3のように、教育基本法との対照/他教科との関連の欄を設けて、生活科との関連（4月）、創造性を養う（5月）など、年間指導計画立案の題材配置 コンセプトを記載しておくといよい。」

小学校1年 音楽科年間指導計画例

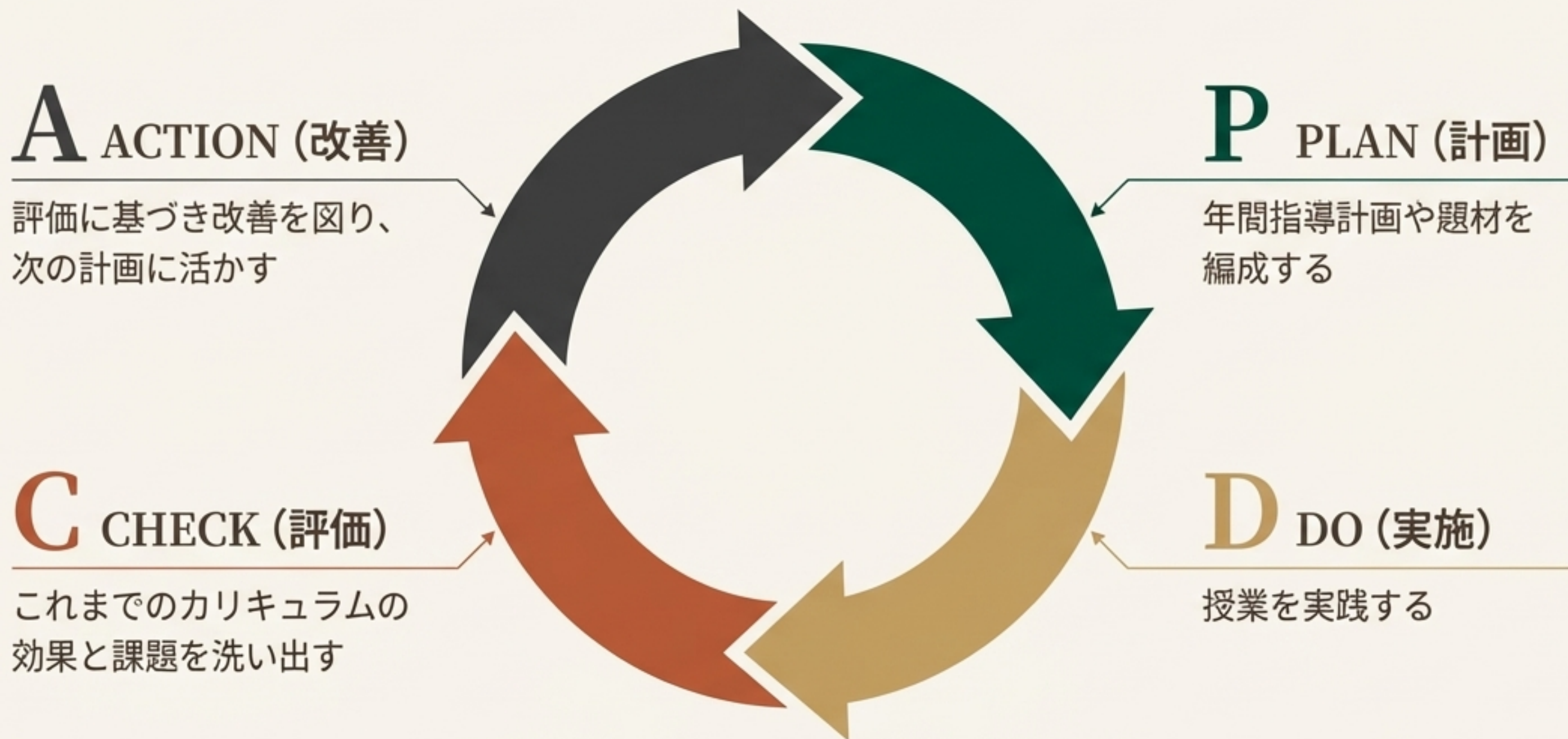
月	題材名	対策	他教科等との関連
1月	—	—	
4月	—	—	
5月	—	—	
6月	—	—	
7月	—	—	

4月: 生活科との関連

5月: 創造性を培う

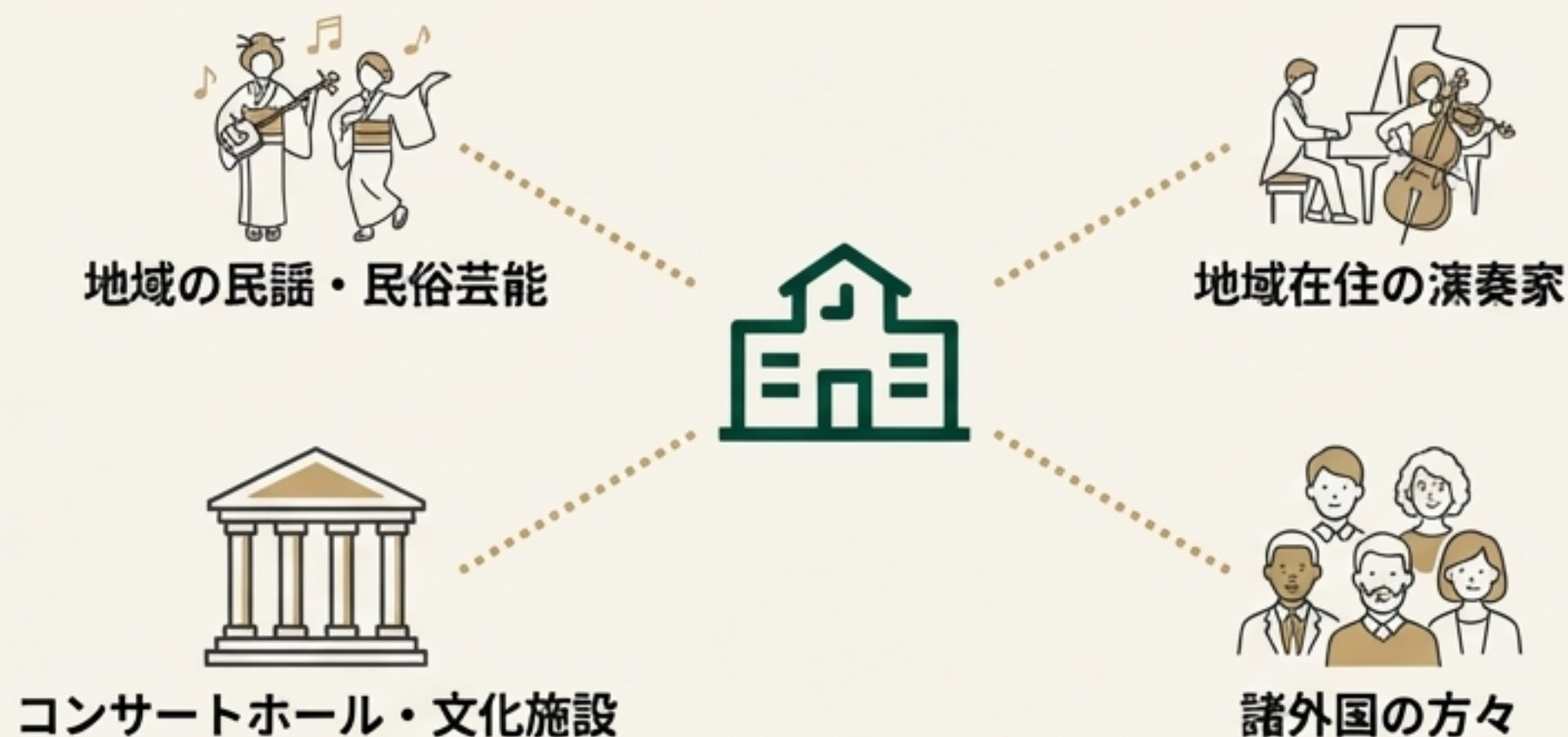
側面②：PDCAサイクルで、教育の質を継続的に高める

授業は「やりっぱなし」にしません。各種調査結果や日々の実践記録を活用し、指導の効果を客観的に確認し、改善へと繋がります。



側面③：地域を巻き込み、学びの資源を豊かにする

教育活動に必要な資源は、学校内だけに留まりません。
地域の人々、文化、施設を積極的に活用し、学びを社会とつなげます。



Examples of Resource Integration:

- 地域の民謡や民俗芸能の伝承・表現活動を題材にする。
- 地域在住の演奏家や諸外国の方を招き、音楽文化活動を行う。
- 総合的な学習の時間や生活科と連携した地域学習を計画する。

組織的な振り返りのための3つのチェックポイント（C）

授業効果の確認と改善のため、以下の視点でカリキュラムを体系的に点検します。

① ポイント① 「学校の教育目標」と「教育課程」はつながっているか？

② ポイント② 「教育課程」と日々の「授業」はつながっているか？
(諸計画のつながりは万全か？)

③ ポイント③ 学校の目標、教育課程、授業は、児童・地域・学校の「実態」に応じたものになっているか？

この点検を通じて、カリキュラム・マネジメントと学校評価がリンクします。

理論から実践へ：教科経営の自己評価

PDCAサイクルを具体的に動かすのが「教科経営の自己評価」です。これは、年度末の形式的な作業ではなく、次年度の計画をより良くするための戦略的な活動です。

1. **指導の重点を明確化**: 音楽科として今年度何を目指すかを定める。（例：感性を育む教科指導の充実、地域と連携した音楽活動の工夫）
2. **評価の観点と方法を設定**: 重点項目をどう測るかを事前に決める。
3. **評価を実施**: 教員だけでなく、必要に応じて児童、保護者、地域住民も評価者とし、客観性を確保する。

指導の重点設定



評価の観点設定



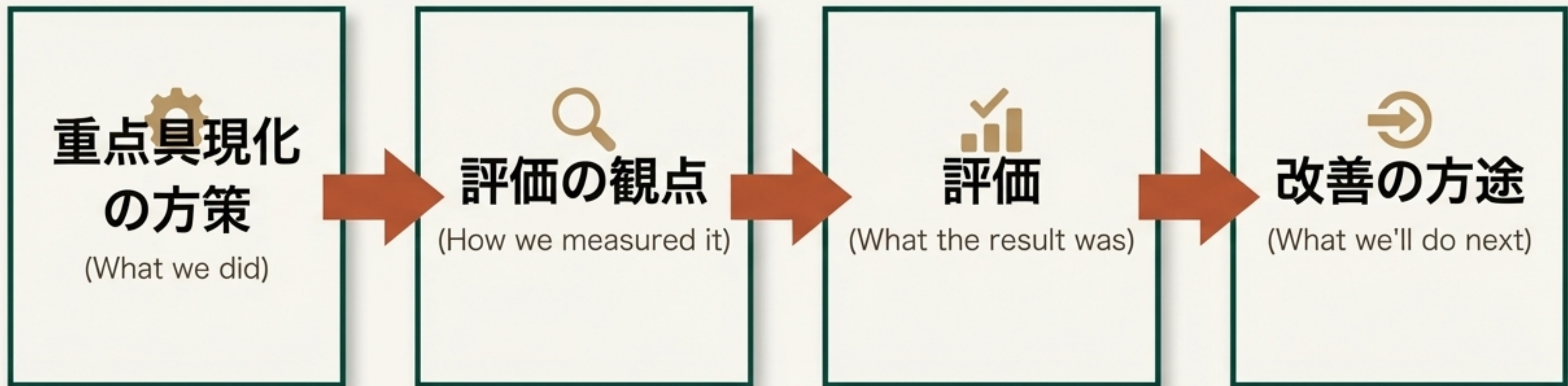
多角的な評価の実施



次年度計画への反映

自己評価のフレームワーク：成果と課題を可視化する

以下の構造で指導の重点の達成状況を整理し、次年度に向けた「改善の方途」を明確にします。



このフレームワークが、次年度の年間指導計画作成の重要な資料となります。

自己評価の実践例①：「主体的・対話的で深い学び」の授業設計

重点項目「感性を育む教科指導の充実」より

重点具現化の方策	評価の観点	評価	改善の方途
方策 題材「追いかけるふしを楽しもう（6年）」で、難易度別に楽曲を選択してアンサンブルに取り組む学習を実施。	評価の観点 自己の技能にふさわしい曲を選択し、音を聴き合わせることができたか。	評価（結果） 8割の生徒が技能にふさわしい曲を選択できた。しかし、相談活動や練習時間の不足が課題として残った。	改善の方途 ・タブレットで家庭でも学習できるよう、コンテンツを準備する。 ・生徒が満足感を味わえる時間を確保するため、年間指導計画の配当時間数を見直す。

自己評価の実践例②：「地域連携」による音楽活動の工夫

重点項目「音楽の生活化を図る場の工夫」より

重点具現化の方策	評価の観点	評価	改善の方途
方策 合唱祭に地域の公民館合唱サークルを招待し、合同合唱を実施。	評価の観点 児童や参加者が合唱する喜びを実感しているか。	評価（結果） 地域の方は喜んでいたが、声域の違いに少々無理があった。リハーサル不足による戸惑いも見られた。	改善の方途 ・校歌の合唱編曲などを取り入れる。 ・公民館の主事との連携を密にし、事前に練習状況を把握しておく。

A young boy and an elderly woman are singing joyfully, their mouths open in song. They are in the foreground, with other people blurred in the background, suggesting a group setting like a choir or a community event. The lighting is warm and soft, creating a positive and inclusive atmosphere.

目指すのは「社会に開かれた教育課程」の実現

カリキュラム・マネジメントは、単なる校内業務の改善手法ではありません。
学校と社会をつなぎ、子供たちの学びをより豊かで現実的なものにするための哲学です。
音楽科の取り組みが、学校全体の教育ビジョンの一部として社会に発信されていきます。

全教職員が、わが校の教育を語れる学校づくりへ

“「カリキュラム・マネジメントで大切にしたいことは、
『社会に開かれた教育課程』の実現を目指し、全教職員が
持ち味を活かしながら力を合わせ、わが校の教育課程を
全教職員が語れる学校づくりに参画していくことである。」”

音楽科の専門性が、そのための力強い推進力となります。